

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02657

研究課題名（和文）保育者の成長プロセスに応じた専門性向上の機会のあり方に関する研究

研究課題名（英文）Research on Professional Development Opportunities Aligned with the Growth Process of Childcare Workers

研究代表者

坂田 哲人（SAKATA, Tetsuhito）

大妻女子大学・家政学部・准教授

研究者番号：70571884

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、保育者の成長プロセスの中でも、特に実践を振り返りながら、意識の変容や実践知の獲得をしながら成長していくというリフレクションモデルを基とし、研究協力を得ることができた園において継続的な観察を行いつつアンケート調査並びにグループインタビューを実施してきた。これらの調査から導き出された主な結果は、保育者にとって学びのプロセスとなるリフレクションの営みや、そこからの学び、成長といった側面からは多くの共通点が見いだされた一方で、その成果、つまりは保育者の資質能力としてどのような側面を評価するという点においては、園において求められる人材像によって大きな差が見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、保育者が働きがいや成長をどのように感じられるかという点をワークモチベーションの観点から明らかにしつつ、さらには保育者の成長プロセスをリフレクションモデルに基づいて検証し、保育者が意識の変容と実践知の獲得を通じて成長する過程を実証的に明らかにしたものである。これにより、リフレクションの方法論としての意義と役割が確認された。また、保育者の専門性開発をめぐる状況が判明し、各園における学びの共通点と評価の違いを明示した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the reflection model, which emphasizes the growth of childcare workers through changes in awareness and the acquisition of practical knowledge while reflecting on their practices. Group interviews and questionnaire surveys were conducted alongside continuous observations at preschools that agreed to participate in the research. The main findings from these investigations revealed that, while there are many commonalities in the process of reflection, learning, and growth among childcare workers, significant differences were observed in the evaluation of outcomes. Specifically, the aspects of the qualities and abilities of childcare workers that were evaluated varied greatly depending on the type of human resources required by each preschool.

研究分野：組織・人材開発論（特に教育・保育の分野において）

キーワード：専門職の専門性開発 人材開発 リフレクション 組織開発

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の時期においては、保育ニーズが急速に高まる中で「量的な確保」を目標に保育施設が急速に増える過程にあった。保育施設が急速に増えたことにより、当然のごとくその影響が随所あらわれ、具体的に指摘され始めていた時期でもある。

組織マネジメントの観点から、この問題を考えるならば、園(=組織)の数が増えることは、それに伴い管理職と現場の保育者の需要が増えるということにつながるわけだが、この両者はともに慢性的に不足する事態に陥っていた。このことは、組織の平均年齢も低下ももたらし(=組織の成熟度も低下し)、マネジメントの課題が随所で指摘されるようになってきていた。

かねてより、保育者の専門性やその開発(Professional Development)に関心を寄せていた本研究チームは、こうした園(組織)を巡る状況の急速な変化に対し、人材育成を基底とした組織づくりの実態とその課題、ならびに解決の方向性を見出すという視点から調査研究に取り組むことにした。

本研究チームが実施してきた従前からの調査を通じて、保育者の専門性開発については、すでに3つの要点が導かれている。1つは、経験年数別に見たときに、保育者の専門性に対する考え方や、必要とする学習の機会や内容が大きく異なっていることである。2つには、保育者が長期的なキャリア形成を志向する割合が増加し、経験者に対する多様な学習の機会が必要とされていることである。3点目に、この要素を左右するのは個人要因のみならず、園における職員構成や管理職の方針などの園組織における人材マネジメントの要因によっても左右されることが明らかにされている。

これらのポイントを用いながら、本研究期間を通じて、保育施設における人材育成や人材マネジメントのあり方について追究してきた。

2. 研究の目的

本研究では、保育者が実践経験を通して専門性を高め、成長していく過程をモデル化することを目指す。本研究チームによるこれまでの調査の結果、保育者が成長していく(専門性を高める)過程においては、その段階に応じた学習の機会が適切に提供される必要があり、保育者に求められる学びの内容や方法は、それまでの経験や技能に応じて変化していくという仮説が導かれている。この仮説に基づき、本研究の目的は(1)保育者の専門性開発のプロセスやモデルを導くこと(2)その具体的な要因等を園組織の状況など保育者を取り巻く要因を踏まえて明確にしていくこと、の2点である。

3. 研究の方法

(1)「リフレクション」による人材育成に取り組む保育施設5園への継続的な参与観察、ならびに、同園の保育者を対象に、随時質問紙調査ならびに聞き取り調査を実施。

(2)(1)の活動の過程で作成された記録用紙を用いたテキスト分析・内容分析

(3)全国保育施設を対象とした2回にわたる定量質問紙調査の実施ならびに定量データ解析の実施(2018年度実施データについては16K04590との共同研究、2022年度実施データについては21K02423との共同研究による)

4. 研究成果

1. 「園における」保育者の成長モデルに影響する要因の特定

1-(1) 組織と個人(園と保育者)との関係において

園における保育者の育成や成長、あるいは研修のあり方などに変化が生じてきていることが確認されている。直近では、特に感染症の影響により外部に出る機会が少なくなったことを受け、園外で研修を受ける対象者やそのねらい、意義などが見直されている。一方で、遠隔で受けられる研修が増えたことにより、園外のような話に触れる機会が多くなったということもあった。さらには、園内の活動についても見直しが行われているなど、保育者の学びの機会のあり方が大きく変化している。

1-(2) 保育者のワークモチベーション、自己成長に関する認識の変化

2018年に実施した保育者の職務満足に関する調査を実施し、2022年に追跡調査を実施した。この間にも、保育者の労働環境は目まぐるしく変化し、保育者不足や離職等の話題、感染症対策などを理由とする業務過多、あるいは不祥事等の件なども取り沙汰され、保育者にワークモチベ

ーションは大きく変化しているのではないかということが推察される。

2018 と 2022 年の結果を相互に比較したが、概ねの傾向としては、(この間に社会的に大きく動きがあったにも関わらず)意外にも大きな変動はなかった。ワークモチベーションに対して、労働条件の項目にあってもそれほどの変化は見られず、保育理念が一致していることなどが重視されている傾向が続いていた。

しかし、こうした事実があまり表面化してこなかったのは、動機づけ要因に基づくワークモチベーションについては、話題として取り上げにくいということがありうるのだろうということである。例えば、給与については、A園とB園とでどのくらい違うのかということは、数字を見れば明確に分かり、例えば「給与がよい園」という条件で見れば、その順位づけが可能である。

一方で、今回の調査において上位に出てきたような「保育観が持っている園」や「仕事がフィットしている園」という園は測定が難しく、また短期間(例えば1日体験などを実施している園も多いが)で判断することも容易ではない。

2. リフレクションによって実践を振り返り、内面的な成長を通して保育者としての専門性を高めていく成長モデルにおける吟味

2-(1). リフレクションを通じた保育者の成長

実践を振り返りつつ、経験学習を通して成長するモデルにおける、リフレクションの営みを継続していく中で、個々の保育者の取り組みに着目し、その内容を整理していくと、気づきが明確にもたらされるリフレクションと、必ずしもそこまで至らないリフレクションがある状況に遭遇する。具体的には、気づきに至るまでのリフレクションの進行を左右するいくつかの要素が存在しうるのでないかという考えにたどり着く。

まず1つには、「リフレクションが深まる」場合と「リフレクションが深まらない」場合の違いである。今回の研究対象園で実施されたリフレクションの実践は、多くの場合に3名程度が組になって対話を通じたリフレクションを行っている。したがって、リフレクションが深まるかどうかは、当人の思慮の浅薄さが指摘されているということよりも、むしろリフレクションを促すための適切な支援が受けられているかという対話の質(質問の質)に影響されることが多いと考えられる。2つは、どのようなテーマをリフレクションの対象として選定するかという点である。リフレクションの対象を選定する際には、「そこから学べると思えること」を選ぶように推奨されている。自身のことを確認し、そこから次の手立てを得る学びのプロセスを得ることとするならば、それにふさわしい題材が選ばれているかどうかはリフレクションの進行をそもそも左右する要素として挙げることができる。3つには、リフレクションをする対象として選ばれている実践に影響を及ぼしている周囲の要因である。それは例えば保育者同士の人間関係であったり、園の方針や考え方を指している。リフレクションの記録を見ていくと、「あなたはどうかだったのか」という質問に対して「~しなければならなかった」という言葉が充てられていることがある。~しなければならなかったという回答があったということは、外的に~しなければならぬという要素が潜在的に当人に“埋め込まれている”ことを意味する。リフレクションの営みにおいては、この構造が本来自身の希望や願い(=保育観とも言い換えられるだろう)に気づいていくことを妨げる場合があり、これが潜在化されていればされているほど、気づきに至るのは容易なことではない。

2-(2). リフレクションを通してどのようなことに気づくのか

8つの窓を用いたリフレクションの対話セッションののちに、話題を提供した保育者は、その対話自体をさらに振り返り、気づいたことやコメントを残している。このコメント欄に書き込まれたことを手掛かりに、整理・分類を試みた。結果、現時点においては大きく次の3点に集約できる。

子どもの姿に対する新たな観点を得た

その場面において、当初抱えていた子どもに対する理解が、後になって別の解釈も考えられたという場合を示している。

状況の理解に対する新たな観点を得た

その場面において、自身が読み取った状況が特定の子どもの視点に偏っていたり、他の角度からの検討が足りなかったということに気づき、状況に対する再理解が行われる場合を示している。

自身の隠された意図や価値観が表出した

その場面において、自身が(思わず)取った行動の背景にある自身の意図や、この場面ではこうあってほしい(こうあるべきだ)という前提によって展開された場面であるということに気付いた場合を示している。

2-(3). 気づきを得ながら行動変容につながらない場合もある

例えば、リフレクションの営みを通して(振り返りを通して)「私はどうしても時間の流れを重視するあまりに子どもたちをせかせる行動に出がちである」ということに気付いたとする。さ

らには、普段「どのように声掛けをすればよいか」という悩みは、子どものことを考えているようで、実は時間のことばかりが気になっていたという自分に気付いたとしよう。そのことに気付いた私は、次回から「子どもをせかささないようにしよう」という解決策に至るだろうと推測される。実際に、ここに取り上げなかったコメントの多くには、同様の傾向が見て取れる。

しかし、実際には「なぜ私は時間のことを気にする人物であるのか」ということが決着しない限り、前提の変容は起きない(=前提を変容させなくとも、「子どもをせかささないようにしよう」という対応は可能だから)。そうすると、「子どもをせかささないようにしよう」という解決策は、対処療法にしかなりえないばかりか、「私は暗黙的には時間のことが気になっているが、それ(=時間を気にしてせかすこと)はよくないことなので、それ(=せかすこと)を我慢して子どもをせかささないようにする」といった、ねじれた状態で新たな前提が形成される。敢えて「ねじれた」という表現を用いたのは、この時点では、「私がせかすかせかささないか」あるいは「いかに我慢ができるか」という別の箇所に論点が移ってしまっているからである。

このことを踏まえると、現状では、リフレクションの営みを経て 変容につながるような気づきまで至らなかったケース(リフレクションに取り組む意味がないということではない)

変容につながるような気づきもたらされたように見受けられるが、変容にはつながらなかったと推定されるケース(上述で検討したようなケース) 変容につながるような気づきもたらされたように見受けられ、その後の行動変容が期待できるケースの 3 つのパターンが見出されたと結論づけることができる。

2-(4). 人材の育成や成長モデルは「園」に強く依存する。保育者ごとの成長モデルという要素よりも「園ごと」の成長モデルの違いの方が明確に表出する。

各園においては、学びのプロセスとなるリフレクションの営みや、そこからの学び、成長といった側面からは多くの共通点が見いだされ、リフレクションが保育者の成長に寄与している側面が確認されたほか、方法論としてのリフレクションの意義や役割についても確認できた。

その一方で、その成果、つまりは保育者の資質能力としてどのような側面を評価するという点においては、園ごとに多様さがみられ、つまりは、求められる人材像によって、人物や、学びをどのように評価し、活用していくかという点において大きな差が見られた。

このことから、本研究の主題である人材育成(保育者の専門性開発)と、園要因との間には関連性がある(園によって違いがある)といえ、それは、各園が求める人材像、ひいては保育観(保育理念)によって規定されるという側面があるということが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂田哲人 | 4. 巻 31 |
| 2. 論文標題 幼児教育の政策動向と教員養成（保育者養成）の課題 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 日本教師教育学会年報 | 6. 最初と最後の頁 64-74 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂田哲人・井上眞理子 | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 保育者の成長・動機付け要因に着目した職務満足度に関する研究 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 大妻女子大学家政系研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 41-46 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 坂田哲人・井上眞理子 | 4. 巻 60 |
| 2. 論文標題 保育者の成長・動機付け要因に着目した職務満足度に関する研究（2） | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 大妻女子大学家政系研究紀要 | 6. 最初と最後の頁 49-56 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 坂田哲人・村井尚子 | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 保育者のリフレクションに対する考え方と取り組みの傾向と分析 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 大妻女子大学児童臨床研究センター紀要『こども臨床研究』 | 6. 最初と最後の頁 13-21 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 坂田哲人, 村井尚子, 落合陽子, 松野敬, 中西淳也 |
| 2. 発表標題 保育のリフレクションの継続的な取り組みがもたらす 保育者の変容を見出す試み |
| 3. 学会等名 日本保育学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 坂田哲人・村井尚子・落合陽子・松野敬・今井豊彦 |
| 2. 発表標題 8つの窓を使ったリフレクションは 保育者にどのような気づきを もたらすか |
| 3. 学会等名 日本保育学会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 坂田哲人・村井尚子・落合陽子・松野敬・今井豊彦 |
| 2. 発表標題 保育実践への協同的な省察の効果の実証的研究(2) |
| 3. 学会等名 日本保育学会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--------------------------------|
| 1. 発表者名 坂田哲人・村井尚子 |
| 2. 発表標題 保育者のリフレクション特性の傾向と分析 |
| 3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 村井 尚子 (MURAI Naoko) (90411454) | 京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305) | |
| 研究分担者 | 井上 眞理子 (INOUE Mariko) (40739182) | 洗足こども短期大学・幼児教育保育科・教授 (42709) | |
| 研究分担者 | 高橋 優子 (TAKAHASHI Yuko) (10729031) | 洗足こども短期大学・幼児教育保育科・准教授 (42709) | |
| 研究分担者 | 岩井 真澄 (IWAI Masumi) (10896608) | 東京未来大学・こども心理学部・講師 (32816) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|